

「ふー……今日は雨だから現場のバイトは休みか～……給料が減るのはキツイなあ……」

両津の急な思い付きにより、庶民の感覚を覚えろと強制的に共同生活を送ることになった中川。

順応する能力は高いようで、既に貧乏＆底辺暮らしに慣れ親しみだしていた。

そんな彼が住んでいるのは警察の独身寮。そこの両津の部屋だった。

散らかり放題の部屋の中、雨が降る外を眺めている中川。

雨が降ったことでバイトが休みになり、給料が減ることを心配するという以前ならあり得なかつたことを考えているところで部屋のチャイムが鳴った。

現在、この部屋の主である両津は「雨だから他のバイトしてくる！」と飛び出しており、部屋にいるのは中川のみだった。

「誰だろう……？ 困ったな、先輩はいないんだけどな……」

ヨレヨレのシャツ姿の中川は頭を搔きながらも玄関に向かう。

そして玄関を開けるとそこにいたのは——。

「あら？ 中川さん？ どうしてこちらに？」

「あ！ 早矢さん……早矢さんこそ……」

——早矢。磯鷺 早矢だった。

黒髪清楚な和風美人であり、中川や両津と同じく亀有署の警察官であった。

オフショルダーのニットにロングスカートという清楚ないで立ちで彼女は両津に会いに来たという。

いきなりの来訪に驚きつつも、両津に会いに来たという早矢を部屋に通す中川。

「えーっと、その辺に座って貰って……お茶はないし……とりあえず、水で良いか……」

慌てながらも早矢に座って貰い、何かお持て成ししなくてはと思いお茶を探すも両津の部屋にはなかった。

早矢は「おかまいなく」と控えめに言つてはいるものの、何も出さない訳にはいかないと中川は冷蔵庫にあった瓶に入った水をコップに注いで出した。

その瓶、ラベルが張っておらず見た目透明だった為に中川は「ミネラルウォーターか」くらいに判断したがその実、両津が知人から購入した格安の密造酒だった。

気づかずに出した中川。

それを早矢は断ることもせずに飲んでしまい、酒に弱い彼女は数分後には——。

「んんん～❤️ 両津さんはあ……まだ戻りませんかあ？ ん❤️」

——顔を真っ赤にしてトロンとした顔で甘い声を漏らしていた。

非常に酒に弱い早矢。一杯の日本酒でもほとんど泥酔状態であり服も乱れ出していた。

「…………っ！」

美人な早矢のどこかガードの緩んだ姿。

オフショルダーのニットからブラ紐をチラリと見せる姿に中川は生唾を飲んだ。

酒を飲んだことで見せる無防備さと、その色気、セクシーさに少しづつ興奮を見せていく中川。

普段はどんな所作も美しく、キビキビとしている早矢が酒もあってゆっくりと手を動かして長く綺麗な髪をかきあげる、それだけでもグッとくる色気に満ちていた。

「…………も、もう少し、で帰ってくるんじゃないですかね……さ、もう一杯どうぞ」

「ん……あ……ありがとうございますひゅ❤️」

既に蕩けてしまっているような早矢に更に酒を飲ませていく中川。

そして、早矢がそれを飲み切った頃、彼女は本格的に酔って来たようで服を脱ぎ出していた。

酔いと、中川に対する安心感からか着ている服を脱いで清楚な下着姿になっていく。

「早矢さん！？ 服を、あ！」

「暑いんです……ん❤️」

服を脱いでいく早矢。

「暑い」なんて言いながらニットを脱ぎ、スカートも脱げばそのスタイルの良い身体を守るのは下着と靴下だけになっていた。

ブラをしているとは言え、少し動くだけで揺れる胸は非常にエロさを見せつけていた。

スレンダーに見えてかなり大き目な胸を下着越しに見せるその姿に中川は——。

「っ！」

「な……っ？！ 中川、さん、何をっ！ あ！」

——気づけば押し倒すようにして襲い掛かっていた。

彼自身、自分の行動に驚き、焦りつつもここしばらくの両津との貧乏生活で色々なものが溜まっていたのか止まる気はないようだった。

早矢もまた驚き、拒否しようとするも酒のせいもあって上手くいかずに、次第にその抵抗も弱くなっていく。

「あ…………っ……❤」

腕を抑えられて押し倒された早矢は、そこで抵抗を止めると恥ずかしそうに小さく呟いた。

「両津さんが……戻ってくる前に……終わらせてください……❤」

「……っ！」

照れたような色気の含んだその表情に我慢が出来なくなった中川は服を脱ぎ棄てる。

無駄な肉のないスポーツなどで鍛えられた身体で、早矢の身体に迫っていく。

彼女は既に無抵抗状態で、自分からは動かないまでもされるがままだった。

中川の手で下着を下され、足を広げさせられて、そしてあそこを晒す。

「あ……っ❤ ん……❤」

綺麗に整えられたアンダーへアの下にある、非常に綺麗な割れ目を中川は指で刺激していく。

軽く刺激し、挿入するのに問題がない程度になるまで愛撫をしたら、鼻息を荒くチンポを押し当てていく。

「んっ……んん……！」

「あっ……っあ❤ ん……っ❤ ふ……うつ❤ ああああ❤」

多少濡れたとはいって、抵抗のある早矢のまんこに中川のチンポが挿入されていく。ヒダヒダの多めのそこに中川は正常位でチンポを挿れると腰を振っていく。

「ん……っ❤ あ……っ❤ あ❤」

部屋の中に響くのは“ぬちゅぬちゅ❤”という淫らしい音に合わせての、早矢の控えめな喘ぎ声。

快感を我慢するように必死に声を潜めながら喘ぐその姿には色氣がある。

しかし、声を潜めてもいても敏感なのは隠せないようで、小刻みにまんこを締め付け、また多めの汁を垂らしていた。

その反応に中川も興奮しながら腰を振っていく。

「はあ……はあ！ 早矢さん……っ！」

「つあ❤ んんっ……あ、あまり、激しくしないで、ください、いつ❤」

興奮した中川の激しいピストンを受けて、腰をくねらせる早矢。

ブラはしていたのだが、どんどんズレていき既に胸を丸見えにしている状態だった。

綺麗で控えめな乳首が露出しており、中川のピストンに合わせて淫らしく揺れていく。

そして、中川のピストンが特に激しくなっていき射精が近いのを教えていた。

避妊の為のコンドームはつけていない、それはお互いにわかっている。

わかっているながら何も言わずに、そのままセックスを続けていく。

「っ！ そろそろ……っ！ あ！」

「はあ❤ はああ❤ あっ……っ❤ もっ……達して、しまい、まっ❤ んんっ❤」

男臭い部屋の中での激しいセックス。

まんこを刺激される快感に、酒の力もあってか耐え切れなくなった早矢は細い身体を震わせながら絶頂していく。

それに合わせて強くなった締め付けに応えるように、中川も腰を激しく振り、そして――。

「早矢さ、っ……早矢さんっ！」

「んんっ……あ……っ❤ い、 いけませんわ、 こんな……あ❤」

——そのまま避妊も何もなく中出しをしていった。

熱く、濃ゆい精液を全て、早矢の膣内に吐き出していき中川は大きく息を吐いた。

早矢は、快感もあるし、セックスの息切れもあり、また酒の効果もあり顔を真っ赤にしていた。

汗ばんだ額に張り付いた髪の毛をかき上げながら、早矢は控えた声で——。

「まだ……時間はありますでしょうか？」

——そう恥ずかしそうに呟くのだった。

それに生唾を飲んだ中川は、再び早矢に向かい——。